
trip in the world ~ C side ~

R A N

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

trip in the world \ C side \

【Nコード】

N5813X

【作者名】

RAN

【あらすじ】

洞窟でさなぎを探す少年。

その洞窟の中で、不思議な少女と出会う。

不思議な少女の魅力に、少年は少女とつながりを深めていく。

世界のバランスを保つ人々の住む世界、陰謀あふれる世界も舞台にし、人々の運命は交錯し、翻弄される。

18禁作品「trip in the world」の世界とつな

がっています。

これ自体にそのような描写はございません。

dノベ掲載作品

こぼれた空間 < 1 >

洞窟を進むと、光が見えた。

カナメは、いつもこの洞窟で取っているさなぎかと思った。

その正体が何かはわからにが、さまよってこの洞窟に入ってくる。

それを回収し、元の場所に戻すことが彼の仕事だった。

それに駆け寄ってみると、光を発しているのは小さい山のような形の物体だった。

そして、その上には少女が目を閉じて丸まって浮かんでいた。

カナメは、彼女を見た時に思った。

さなぎみたいだ、と。

物体が放つ光の色も、さなぎが発するような色だったが、丸まって目をつむる姿が成虫になる前のさなぎのように見えた。

しばらくカナメが、恐らく惚けた顔で少女を見てみると、少女はゆっくりと目を開けた。

それはまさに、さなぎが成虫に変わる時に脱皮をするような。

そして、彼女の瞳はカナメをとらえた。

カナメはその時、違和感を感じた。

恐らく、少女の瞳のせいだろう。

その瞳は不思議だった。深いのか濁っているのか、見たことのない光がその目には宿っていた。

カナメが言葉を口にできずいると、彼女が口を開いた。

「アナタは、誰ですか……？」

確かに目の前の彼女の口が動いているのに、カナメは、彼女の声

は遠くからのように感じた。

「俺はカナメっていうんだ」

俺は少し戸惑いつつも、少女の問いに答える。

少女は俺をじっと見つめたまま、何も喋らない。

「君の名前は何て言うの？」

少女はまだ俺を見ている。

「……………」

何となく俺も目をそらせず、見詰め合ったまま、数刻が過ぎていった。

「私は識別ナンバー f l o w - N O . 2 です。愛称はフロウと定められております」

やっと少女　フロウは口を開いた。

しかし、彼女の言う言葉には、聞きなれないものが少々多かった。カナメは首をかしげた。

「えーっと、その識別ナンバーってどういうこと？　君は一体何者なの？」

またフロウは口を閉じて黙り込む。

目がチカチカするのを感じ、足元を見ると、彼女の足元の小山のような物体の光が小刻みに明滅していた。

彼女が黙り込む時、何か意味があるのだろうか。

「……………私は、ホストコンピュータ制御、または人間と会話することを目的として製造されました。本体はこの足元の機械で、常にエネルギーを生み出すように設計されています」

そして彼女がまた口を開く。

その口調に抑揚はなく、またやはり声の調子もどこか違和感があった。

よく聞くと、声が遠くに感じたのは、その声が彼女の口からではなく、足元の、彼女が本体という物体から発せられているからだ。た。

そして、やはりカナメにはフロウの言っている意味があまりよくわからなかった。

しかし、これ以上話を聞いても理解できなさそうだと判断し、機械という概念はわからないことはなかったので、とりあえず彼女は人間ではないのだ、ということに納得することにした。

「俺はここら辺で、光るさなぎを探しているんだ。さなぎはあまり人がいない所を好むから。その機械の君が、なぜこんな所にいるの？」

またフロウは黙り込む。足元の機械が激しく明滅していた。

今度の沈黙は、今までで一番長かった。

何かまずいことでも聞いたかな、とカナメは少し不安になった。

「……………わかりません」

長い沈黙の後に、ようやく出た言葉はそれだけだった。

カナメはますます首をかしげ、眉根を寄せた。

「なんでここににいるかわからないってこと？」

「……………はい」

今まで、どこか遠くを見ているようだったフロウの表情に変化が出た。

その目を悲しげに伏せて、答えた。

「まあ、確かにここに君がいるのはかなり不自然だから、何かあったのかもしれない。見たところ、君の意志で動くことはできなさそうだから、誰かに連れてこられた、というところかな。でもどういう目的でここに連れてきたんだらう」

「……………わかりません。わかりません。わかりません……………」

フロウは同じ言葉を小さく繰り返し眩き始める。
カナメは何か危険を感じ、彼女に触れようと手を伸ばした。

が、その手は空をきるだけだった。

「!」

だが、フロウにはカナメが手を伸ばしたことはわかったようで、言葉を止めた。

そして、カナメを驚いた顔をして見た。

カナメも驚いて、自分の手とフロウを交互に見た。

フロウはすぐに先ほどの、どこか遠く見ているような顔に戻っていた。

「私は実体がなく、この機械から投影されている立体映像ですので、触れることはできません」

カナメはその言葉を聞いて、手を慌てて引っ込め、苦笑いを浮かべた。

「そ、そうか。なるほどね。まあ、とりあえず君が何ともないみたいだからよかった」

フロウはカナメを見つめたままだった。

カナメは何となく落ち着かない気分になる。

彼女の目は今までに会ったことのある人間のものとも、動物のものとも異なっているせいだ。

白目の部分が少なく、ただ顔に切れ目が入っているように見えた。カナメにとって、彼女の全てが未知のものだった。

「ところで、君はこれからどうしようと思うの？」

カナメはその不安感を取り去ろうと、フロウに話しかける。

「……このような状況の対応プログラムは用意されていませんので、私にはどうすることもできません」

「そ、そうか……」

出口の見えない答えばかりで、これ以上話しても何も無いと思われたが、カナメはなぜかそこから離れることができなかった。

「……私から聞いてもいいですか……?」

「うん、何?」

彼女の方から反応があり、カナメはそれに嬉しそうに答える。

「なぜアナタは、私に話しかけるのですか?」

「……………」

カナメは答えにつまる。

笑顔も一気に冷めて、難問を前にして顔を歪める。

それは正直言っただけに聞きたかった。

それでも、この少女と話をしたい自分がいた。

「……………それは正直言っただけに、俺にもわからない。……何となく君が気になって……………」

カナメは言葉が思いつかず、ただ声を口の奥で転がしていた。

手は思わず自分の服などを掴んだりして、気まずさをごまかそうとしていた。

今度はフロウが首をかしげて、カナメを見つめていた。

だが、彼女はカナメの返答を待たずに口を開いた。

「もしよければ、私とお話をしてもらえませんか?」

「え…………?」

フロウの申し出に、一瞬カナメは驚いて、彼女を見つめたまま固まってしまった。

フロウは、そのカナメの反応に、不安そうに顔を歪めた。

カナメはそれに気づいて、すぐに答えた。

彼女の申し出は、カナメにとって願ったり叶ったりだったから。

「も、もちろんだよ!」

そのカナメの返答に、フロウは表情を和らげた。

初めて見せる、笑顔と呼べるものをカナメは見た。

「よかったです。私は会話するために作られたので、話しているうちに何かわかるかもしれません」

「そうか。それじゃあ、お手伝いさせてもらおうよ」
カナメもフロウの笑顔に、嬉しそうに言う。

二人の、出口の見えない問いはまだ続く。

RAN

2006/8/10

こぼれた空間 <2>

「とりあえず、どうしようか」

話す、とは言ったが、たった今初めて出会った二人だ。

話すことがありすぎて、逆に何から話せばいいのかわからない。

カナメには、聞きたいことはあったが、フロウは自分のことがわからない。

それでは聞きようがなかった。

それなら、彼女が何かを思い出すようなきっかけを作ることをしてあげなければいけない。

それが、難しかった。

しばらくの間、二人は首をかしげた状態のまま、黙って向かい合っていた。

「よし、それじゃあ、洞窟の中を回ってみようか」

そして、カナメは動くために、フロウを持ち上げた。

しかし、そこでふと止まる。

「持つちゃったけど、大丈夫？」

フロウの下にあるその仕組みはよくわからないが、何となくこれが彼女の源だと察したので、それを抱えてはみたが、急に不安になり、フロウにカナメは問うた。

フロウは優しいげな笑みを浮かべて、うなずいた。

「はい。私の本体の中にはエネルギーを自ら作り出す装置もあり、持ち運びするために作られたものでありますので、問題はありません。重くはありませんか？」

「うん、平気。それじゃあ、とりあえずこうやって持ったまま移動してみるね」

「はい」

そして、カナメとフロウは洞窟の奥へと進んでいった。だが、景色が大きく変わるわけでもない、洞窟の中では、何も話の種になりそうなものは落ちていなかった。

だんだんと二人の沈黙が重くなっていく。

カナメは正直焦っていた。

とそんな時、目の前の脇道から出てくる人影があった。

「誰！」

何か変化を求めていたカナメではあったが、この洞窟であまり動くもの、しかも人型のものを見ないので、つい警戒をして、大声を出してしまった。

影の人物は大きく肩を震わせて、カナメの方を見た。

近づいて、フロウの放つ光が当たると、そこにはカナメの見知った人物がいた。

「フェイリア……？」

カナメの声に、目の前にいた影が動いた。

そこには、長い波打つ黒髪を持つ少女がいた。

その顔は奇妙に白かったが、不気味さは不思議と感しない。

フェイリアと呼ばれた少女は、表情を変えず、ただカナメを見ていた。

「どうして君がここにいるんだい？」

カナメはフェイリアにそう言いながら、近づく。

フロウは、カナメに抱えられたまま、黙ってフェイリアを見ていた。

少し、落ち着かない気持ちを感じながら。

「……………」
フェイリアは少し考えるようにうつむいてから、人差し指をたてて、クルクルして見せ、自分の首をかしげた。

「……………自分もわからないってこと？ つまり？」
カナメはさして気にした様子もなく、フェイリアの合図を見て、考えながら口を開く。

しかし、フェイリアはまだ足りなさそうに、人差し指をさらに速くグルグルさせた。

「ぐるぐる……………同じ所をさっきから回ってるってこと？」
今度はフェイリアはうなずいて、指を回すのをやめた。

「……………ってことは、つまり元の所に戻れないの？」
カナメは、妙に冷たい汗が出ているのを感じていた。
そして、できれば見たくなかった答えを、フェイリアからもらう。
彼女は、こくりと静かにうなずいた。

「カナメさん」

沈黙を破るように、フロウが口を開いた。

「あ、何？」

カナメは思考から解放されたように、フロウを見た。

「あの、彼女はこういう方なのですか？」

「あ、ああ、そうだったね。ごめん。彼女はフェイリアというんだ。僕の知り合いだよ。ちなみに、喋れないから、手とか、体を動かすことで会話をするんだ」

カナメの話聞きながら、フロウはフェイリアを見ていた。

フェイリアも、フロウの視線に自分の視線を合わせる。

「……………とても、不思議です……………」

「……………そうかい？」

フロウの言葉に、カナメはそれ以上何も言わなかった。
フロウから視線をはずすと、フェイリアはカナメをやや鋭い目線で見ている。

カナメは、その視線が少々痛かった。
フロウに見えないように、苦笑いを浮かべて、首をかしげた。

「それじゃあ、フェイリアも一緒に歩いてみようか？」
カナメの提案に、フェイリアはうなずいた。

あまりノリ気ではなさそうだが。
「嫌なら嫌って、言っていないんだよ？」

カナメもそれを感じ取ったのか、にこやかだが、やや刺々しい口調になる。

フェイリアは静かに首を横に振った。

「じゃあ、行こうか」

カナメは無然としつつ、歩き出した。

フロウは、心配そうに二人を見ていた。

フェイリアは、カナメの後ろから、フワフワと少し体を宙に浮かせてついてくる。

また洞窟の奥に向かってカナメ達は歩いていた。

「カナメさんは、どうしてこの洞窟を自由に動き回れるのですか？」
フロウが感じていた疑問を口にした。

「ん？ まあ、俺はずっとここにいたからかな。あとは、これがあの程度方向を指し示してくれるんだよ」

と、カナメはその肩に預けていた竿の先についている、水晶のような塊をフロウの前に示した。

「これは、何ですか？」

「うーん、それはちょっと言えないんだ」

「そうですか……」

相変わらず、フェイリアの視線は痛かった。

R
A
N

*
*
*
2
0
0
7
/
4
/
5
*
*
*

こぼれた空間 <3>

「あれ、また誰かいる？」

カナメ達が歩いていると、その先に壁際につづくまる人のような黒い影が見えた。

近づいて光を当てようとすると、その影は驚いたのか、慌てて後方に飛び退いた。

「ああ、怖がらないでください。俺達はあなたに危害を加えるつもりはありません」

カナメはとりあえずそう断りを入れると、相手が動かなくなっただけ、光を発する水晶を近づけた。

そこには、ぼさぼさの白い髪と鋭い赤い目が異様に暗やみに映える少年がいた。

よく見ると、首に何やらごつごつした物をつけていた。

「俺はカナメといいます。あなたは？」

「……………ジャック」

カナメを値踏みするように、上から下に幾度か眺めてから、少年は口にした。

姿勢は、後方に避けて座り込んだままだ。

「あなたは、ここがどこだかわかりますか？」

「いいや」

「では、あなたはどこからいらつしゃいましたか？」

「あそこを何と呼べばいいか、俺にはわからん。ただ、色々なものがあるのに、何もない場所だ」

ジャックがそう言うと、フェイリアは静かに空を滑り、ジャック

に近寄った。

ジャックはまた身構えたが、カナメが声をかけると、ゆっくりと構えをといた。

それを確認するとフェイリアは、片手をジャックの額に当てた。そしてしばらくその状態でいると、ゆっくりとフェイリアは額から手を離し、カナメを見た。

カナメは、フェイリアに小さくうなずいてみせた。

それを確認すると、フェイリアはジャックから離れ、またカナメ達の後ろについた。

ジャックは、カナメ達を不審そうな目で見た。

さすがにカナメも気まづくなつた。

「いきなり不躰な対応をしましてごめんなさい。どうやらあなたは、別な世界からいらしたようなので、それを今彼女に確認してもらつてたんです」

「別な世界？」

「実はここは様々な世界とつながってる場所なので、よくそういうことが起こるんです。あなたのいた世界に、こんな洞窟があった記憶はありますか？」

「ない」

「ですよね。その時点で、何かおかしいと思いましたが」

「ああ」

「そのおかしい理由が、別な世界だから、なら、まだ納得できますよね」

「もしそうだとしたら、俺は元いた場所に帰れるのか？」

「話が早くてよかったです。この洞窟には、いくつもの道があります。この道の数だけ、世界があり、つながっています。戻りたいと願って歩けば、自然と元の世界に近づけます」

「本当か」

「嘘を言っても、何にも俺の得にならないですから。それに、ここ

で動かないでいるより、動いた方が、何かあると思いませんか？」
ジャックは、にこやかにそう言うカナメを見上げて、ニヤリと笑みを浮かべた。

「ん、どうかした、フロウ？」

フロウのジャックを見る目がおかしいことに気づき、カナメは尋ねた。

「私はこの方とどこかで会ったことがあるような……覚えがありません」

「え？」

フロウの言葉に、カナメはジャックとフロウを交互に見た。

ジャックも、その言葉を受けて、カナメに抱えられて、小さく本体から映し出されたフロウに姿勢を合わせて、彼女の顔を見た。

そして、フロウと視線が合った瞬間、ジャックの表情が急に揺れた。

「ジャックさん？」

カジカが声をかけると、ジャックは慌ててフロウから離れて、カナメを見た。

その目は、どこかすがるような目だった。

カナメは、目を鋭くした。

「ジャックさん、彼女に見覚えがあるんですか？」

カナメの言葉に、フロウもジャックを見つめた。

「……………別に」

ジャックは二人から目をそらし、そう呟いた。

その表情は言葉とは裏腹に、苦しそうだった。

「……………そうですか……………それじゃあ、歩きましょうか」

本人が何も言わないならば、聞いても無駄だ。

カナメはジャックの言葉を信じていなかったが、とりあえず足を進めることにした。

しばらく歩くと、急に後ろにいたフェアリアが、皆の横をするりと通り、前に出てきた。

「どうした、フェアリア？」

カジカが声をかけたと同時に、フェアリアは脇にあった通路の一つの前に立っていた。

カジカ達は、そのフェアリアに近づいて、フェアリアが見つめる道の先を一緒に覗いた。

通路の先は真っ暗で、何があるかは、やはり見えなかった。

だが、カナメは何か、今までの通路と違うものを感じ取った。

「風だ……」

「？」

カナメの呟きに、ジャックとフロウは疑問を浮かべた顔をしていった。

だが、カナメはそれに答えようとはしない。

「ここからなら、帰れそうな気がするかい？」

カナメは、じっと通路を見つめているフェアリアに聞いた。

フェアリアは、そのカナメの問いにうなずいた。是、ということだ。

「じゃあ、出口まで送っていいかな」

カナメは、その時に、ジャックとフロウに問うた。

「私は問題ありません」

「構わない」

「どういう風になるか、見てもらった方がいいと思うんだ。それじゃあ、行こうか」

そして、カナメ達はその通路へ進んでいった。

カナメ達は、しばらく真つ暗な通路を歩いていた。

今まで歩いてきた所は、ほのかに岩が光を発していて、青白く照らされていたが、この通路はそれがなく、本当の暗闇。

カナメの持つている水晶と、フロウから発せられる光だけが頼りだった。

この光の具合でも今までと違うことがわかるが、この通路に入った途端、空気が重くなったように感ぜられた。

まるで空間に拒否されているような、ここにいてはいけないような気持ちにさせられた。

ジャックは落ちつかなげに辺りをキョロキョロと見回していた。

早くこの空間から出たい、とでも言いたげに。

どのぐらいその通路を歩いたことだろう。

だんだんと空間に慣れてきた頃、前にいたフェアリアが急に大きく浮き上がり、より速いスピードで前へ進みだした。

カナメ達は慌ててその後を追っかけた。

そしてフェアリアは行き止まりの前で止まって、カナメ達を待っていた。

「見つかった？」

カナメは安心したような笑みを浮かべて、フェアリアを見ていた。フェアリアも、柔らかな表情でうなずいた。

「どういうことだ？」

ジャックには、ただの行き止まりしか見え、彼らが何を見つけたのかわからなかった。

「ああ、俺にも見えてないけど、フェアリアは帰る道を見つけたらしい。この行き止まりの向こうが、彼女が行きたい場所につながっているみたいだよ」

「俺らには見えない、というのはどういうことだ」

「俺達が求めている道じゃないからだよ。彼女が求めている、彼女だけ

の道が、彼女の前に示されてるんだ」

「……………」

ジャックは、わかったような、わからないような、何とも言えない顔をした。

「まあ、そのうちわかるようになるよ。今は、見てればいい」

カナメはそう言うと、フェアリアに向き直った。

フェアリアは一回くるりと回ってみせると、次の瞬間には、光になっ
て消えた。

フロウとジャックは、目をみはった。

皆、フェアリアが消えた後を、しばらく見つめていたが、カナメがジャックに向き直ると、ジャックは慌てて気を取り直した。

「まあ、今みたいな感じで、道が見つかるよ、それはその人には光溢れる出口のように見えて、そこに入ると、今みたいに行けるってこと」

「まあ、とりあえずそういうことで納得することにする」

「それは有り難い」

カナメはにっこりと笑顔で言った。

「それじゃあ、俺達もまた元の道へ戻ることでしょう。ジャックとフロウの道を見つけないとね」

RAN

2007/4/5

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5813x/>

trip in the world ~ C side ~

2011年11月3日22時20分発行